小田原俳句協会報

理事会だより（1・9）

一、梅まつり俳句大会について①選句取りまとめ中、点盛16日　②大会の役割分担を再確認。（事業部、総務部）

二、立春青空句会の参加申込は現在16人。（事業部）

三、合同句集第十三集が完成し配布、外部寄贈配布分を担当者へ、追加分集金。（編集委員長、総務部、会計部）

四、郵便料金値上げに伴い郵送分相当の会費が不足していることについて問題提起あり、値上げの方向で継続検討となる。（総務部）

五、総会に向け会員動向の確認要請。（総務部）支出分請求は2月末締切にて報告のこと。（会計部）

六、新会員：湯浅義幸さん（小田原鹿火屋会）

理事会日程　3／13　4／10　5／8　**定期総会**　4／24
（毎月第2木曜日　けやき15時より）

「俳句おだわら」10句抄（689号より）

齊藤　桂　抄出

天高し藍袢纏の車夫走る　川本　育子
追悼の稿につまづく夜長かな　池田　忠山
朝戸繰る遠目に光る吊し柿　植松テル子
一枚を羽織り外に佇つ後の月　西賀　久實
空谷に溜まる谺や鬼胡桃　芹澤　常子
狐火やうからやからは減るばかり　村場　十五
投函の弾みし音や冬に入る　髙橋みどり
子と影を重ねて歩く良夜かな　青木たけを
凩やさらはれて行く街の色　森田　久江
奥入瀬の霧の早さよヒュッテの灯　須田　聡子

佐々木重満　抄出

天高し藍袢纏の車夫走る　川本　育子
桐一葉深海魚めく美容室　竹下由里子
一向に渋柿の渋ぬけきらず　神山つとむ
秋深みゆく透明なボールペン　瀬戸　悠
秋暑し下宿の壁にピンナップ　庄司　下載
薬師寺の写経道場秋灯　大島美恵子
墓仕舞ふ読経粛々冬紅葉　横塚　昌平
凩や龍神伝説この湖に　河本　純子
身に入むや辞書に引かれぬ何万語　畠　梅乃
金木犀びっしり世は金高謄　岩楯惠津子

年間ベスト一句集（一四六名）

底力見せると啖呵受験の子　青木　孝子
広辞苑閉ぢる響きも夜の秋　青木たけを
羽ばたいてまた羽ばたいて巣立鳥　青山　典子
畦道に星数へ合ふ賢治の忌　青山　典仁
夢つなぎ命つなぎて日記買ふ　秋山　昇
澄む秋の水はひかりとなる水車　足立　和子
探梅や言葉少なに戻りたる　新井たか志
奉納の童の舞や花の雨　荒井ちゑ子
ほうたるへもはやどの手もとどかざる　池田　忠山
集合は銀座ライオンパナマ帽　池田　令子
夢に泣き夢を摑んで夏五輪　石井きよ子
すれちがう風の私語聞き青き踏む　石井千代子
春一番楽しき舞台開幕す　石井　秀稀
防人の夫恋ふる歌碑花とべら　石田加津子
十六夜の流れる雲の早さかな　板谷　雅泉
虫に野を返して今日の足洗う　市川めぐみ
派出所の泥新しき燕の巣　一ノ瀬茂代
一輪で足る水仙のかをりかな　伊藤はる子

俳句おだわら（1・19〆切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（12・20）　久江報

悔一つ消し去る風や古暦　足立　和子
銀杏散る御縁もたらす招き猫　川本　育子
鍋に耳そつと伺ひ豆を煮る　髙橋　小糸
夕雲のおだやかなるや冬ぬくし　山﨑　悦子
草の実の綿を飛ばして冬ぬくし　湯浅　義幸
和歌一首濃淡の舞ふ神無月　近藤　久江

◆こよろぎ（1・9）　つとむ報

大皿に鰤のお造り宴（うたげ）なか　大澤　紀子
カレンダーいちまい残る十二月　髙杉掘三朗
切り通し抜けて広がる大晦日　板谷　雅泉
山水の跳び散つてゐる草氷柱　植松テル子
吹きすさぶ赤城颪や干大根　神山つとむ

◆香雨・梅ごち（12・22）　忠山報

駆けて来る紅い頬つぺの冬帽子　肥後ちさこ
まづ幼へと切り分くる聖菓かな　関戸わよこ
遠山は白きをのこし浮寝鳥　青山　典子
定置網揚ぐる漁場（ぎょば）や冬鷗　門松　鳳文
子の夢をちりばめクリスマスツリー　吉田　百代

春はまーるく三角四角さようなら　伊藤　道郎
地震あり戦争もありもう野分　岩楯恵津子
入梅といえど雨なく木々無言　岩本ひさみ
だれとなく触るる瓢や無人駅　植松テル子
物云はぬ石に問ひたきこの暑さ　内田知江子
土星の輪ぐるぐるまわれ野蒜駅　大石　和子
めいめい葉っぱだから今ここにいる　大石　雄介
木枯や勘定聞きて冷める酔　大佐田うづき
住みなれし借家もよかり秋刀魚焼く　大沢　年子
煮凝りをつついて話す今日のこと　大澤　紀子
涼風や電力王の長寿眉　大島美恵子
蝉時雨ひとり読書の昼さがり　大塚　行人
彼岸花地上の温度知らされず　岡田　典代
能登大隆起海女が海を探してる　岡本　史郎
なるやうになる仮の世や花は葉に　尾崎　一夫
店先に郷里の名やびわの箱　尾崎　幸子
柿ひとつ残され庭が軽くなる　小澤　純子
偏屈の影も偏屈日の盛り　小澤　園子
「バスが来ましたヨ！」白杖の背に春の風　小野　菊土
秋の夜に永久の調べやカンパネラ　香川　花子

神宮へまつすぐ銀杏落葉道　吉田　康雄
冬鷗雲低き日は低く飛び　陌間みどり
荒縄でみがく青竹年用意　小澤　純子
たちまちに狩行の逝きし年つまる　池田　忠山

◆山北（12・19）　由里子報

冬用意母には重き灯油缶　和田恵美子
吟詠の発声けいこクリスマス　尾崎　幸子
朝しぐれ病院食の咀嚼音　星　一義
街角の工事師走のナポリタン　石田加津子
年の瀬の小田原城の白さかな　竹下由里子

◆春野（12・15）　きよ志報

村老いて色なき風の中に住み　秋山　昇
冬の雲水平線に貼り付きて　伊藤はる子
しろじろと風入れ替はる冬田かな　内田知江子
眠る山然れど木魂の返る山　尾崎　一夫
年を越す背中合せの死神も　瀬戸　悠
虎落笛赤子に眠る力あり　二見　和江
住職のひとくさり枯葉がはらり　長谷川きよ志

◆みなみ（12・21）　かほる報

脱ぎ捨てし子のセーターの日の匂い　斉藤　静
青空と何語り居る冬田かな　小瀬村信子

立山の姿くつきり今年酒　柏木　良花
春めくや身の箍すこしづつ緩び　片野　節子
吾亦紅ただあいづちが欲しいだけ　勝木　澄子
あぢさゐの雫に濡るる母の下駄　加藤　幾代
病む地球の季節を繋ぐ虫の声　加藤かほる
才一走者陽炎を越えてゆく　加藤　健治
山百合や地下千尺の水旨し　加藤　富江
万物の目覚めの序章二月光　加藤　春江
徒然になぞる筆先春燈　加藤まり子
眠気誘う未完の一句春炬燵　加藤れい子
吹くほどに空は七色しやぼん玉　門松　鳳文
落葉踏む詩人の言葉光りけり　神山つとむ
色冴えた「若みどり」新茶いたゞく　川合　昌子
冬の夜イルミネーション幸となる　川瀬　芳子
秋日燦戦禍まとひし烏帽子岩　川本　育子
もぎたての苺ほほばりゲーテ読む　河本　純子
泣いて笑つた悪友逝く如月　菅野　英余
灯台は海のキャンドルペリー祭　北村　文江
鶏日や噴煙しるき大涌谷　木村　幸枝
立冬の小石をはじく鍬仕事　久保寺トミ子

「きれいだよ」友のメールに冬の月　柳川　紀枝
空撮の御殿場線や雪の富士　加藤　富江
大根掘る使い古した鍬いとし　加藤れい子
メモといふ命令書もて歳の市　加藤　健治
空缶の音を遊びし冬の風　市川めぐみ
静けさや風の口笛きく夜寒　豊田　幸枝
ノーベル平和賞山茶花は咲き継ぐ　加藤かほる

◆おほゐ（1・8）　きよ子報

初詣神に転がる五円玉　中津川晴江
初夢や白蛇願えど現われず　廣田　悦子
富士山の吐息のような冬夕焼　原　仁子
初春や良きも悪しきも聞き流す　松良　榮美
初夢や枕の下に俳句集　安池　利枝
数十年喜悲を交わしぬ年賀状　二上　光子
初夢や一世（ひとよ）西施の膝枕　横塚　昌平
力抜く冬の大地をおこす雨　石井千代子
翅休め祈る姿の冬の蝶　小野　菊土
湯豆腐や湯気の向こうへ迷い込む　香川　花子
初夢や源氏の君と詠みあえり　加藤　春江
ふるさとを包み込みたる初日の出　瀬戸とみ子
慎ましく恙無き日や去年今年　髙橋みどり

「それいいね」師は褒め上手春うらら　神野美代子
蝌蚪生れ子盗ろの歌の聴こえ来る　小島ノブヨシ
八十路など忘れ若菜を摘みにけり　小瀬村信子
ふるさとを雁字搦めに蔦紅葉　小林永以子
厨に本ひらく晩学十三夜　小林　環
心字池落款のごと春の鯉　近藤　久江
まんさくや木片(こっぱ)払ひて木地師立つ　西賀　久實
古道に夕かなかなの降り積もる　齊藤　桂
蓬餅民話の里の竹の箸　斉藤　静
狂おうぞなお狂おうぞ夏祭　佐々木重満
暗渠出て流れ滑らか落椿　佐宗　欣二
人生の幾山河をなめくじら　佐藤　正子
赤煉瓦古りし繰糸所秋の風　澁谷　明子
秋深む茶すする音とまほうびん　清水美代子
振り向くと近しき山や花の雲　下平　美子
水切りの石は戻らず卒業す　庄司　下載
梅日和博物館のはにわの眼　杉本　久子
なんとなく春のポケット裏返す　杉山あけみ
咲き疲れ見ゆ懸崖の菊の先　杉崎　せつ
愚図る子や菠薐草の軸まっ赤　須田　聡子

三世代声弾みたる去年今年　中根登美子
寒の水飲んで余生を輝かす　中村　昌男
蒼天や富士堂々と初句会　石井きよ子

◆実のり（1・15）　たか志報

阿夫利嶺に紫雲たなびき寒に入る　荒井ちゑ子
庭の木々凍えるように雨の中　岩本ひさみ
寒夕焼影絵のごとき観覧車　杉本　久子
鶏日や中華街に食べ歩き　木村　幸枝
七草の前夜の雨を良しとして　新井たか志

◆零（1・16）　史郎報

魂の欠けら集めて冬銀河　青木たけを
中村哲(てつ)さんの水奔ることザ・迎春　伊藤　道郎
本年も七転八起春を待つ　川合　昌子
焼かれる前の餅の深い沈黙か　佐藤　正子
冬蝶よ自分の場所に留(と)まりなさい　中村　裕子
スケッチブック妻と曾孫の初詣　野川木一路
婿殿は芹たっぷりの雑煮好き　本多登美子
老父母の踏ん張る能登のおぼろ　岡本　史郎

◆沈丁（1・16）　寶子山報

福笑目は宇宙へとドラエモン　若村　京子
福笑笑はせ上手の父が居た　柳澤ミサ子

竿灯の倒れぬほどにたわみけり　関戸わよこ
陽だまりににんげんたまる雀もたまる　瀬戸　正洋
野仏が歩きだすよな梅日和　瀬戸とみ子
鳥雲に入る鳴鈴をもう一度　瀬戸　悠
花冷や玉針に留め展翅終ふ　瀬戸　りん
川上に暮るる孤峰や松明けぬ　芹澤　常子
父の日や老いてなほ似るその仕種　髙井　幸子
宵闇や猫の目光る漁夫の納屋　髙杉掘三朗
朝空の槻若葉父逝きし日も　髙橋久美子
浮雲や宇宙への夢冬ぬくし　髙橋　小糸
電飾に木々の輪郭冬ざるる　髙橋千代子
春兆す五指の動きの軽きかな　髙橋みどり
んびんびとんぐんぐんぐと今年酒　瀧本　敦子
「ケセラセラ」が母の口癖白障子　竹下由里子
ゆふぐれや案山子も何処かにかへりたい　武居裕美子
下萌や日向へぴんと山羊の紐　田下　昌人
倒壊の家を出でます加賀雛　田中　惠一
野良帰り三和土にこぼす春の泥　田中　幸子
備長炭叩けば山の木霊かな　田畑ヒロ子
ハンモック悪の限りを考える　佃　悦夫

目も耳も一塊まりや福笑　田中　惠一
福笑おかめうどんの匂ひあり　河本　純子
潔白を勝ちとった姉梅真白　勝木　澄子
七草やいつもの空と白い雲　菅野　英余
眉のない娘に父の福笑　髙井　幸子
お多福の面いとほしみ福笑　片野　節子
梅ふふむ初恋ほどの恥ずかしさ　峯尾ユキエ
春浅し米粒ほどの白き花　清水美代子
大根の土より出でて真白なる　松下　俊之
どこかしらその人に似る福笑　武居裕美子
初日記元気といふ字をどりだす　森田　久江
福笑参加したそな父の顔　川瀬　芳子
新旧の顔が揃ひて福笑　寶子山京子

◆鷹（1・7）　十五報

探梅や休み処に飲む抹茶　青木　孝子
冬晴れの庭師の手際見て飽かず　池田　令子
夜通しの煮炊きなつかし数へ日よ　西賀　久實
綿虫を払ひ払ひて門扉閉づ　佐宗　欣二
ポイントに払ふコンビニ冬の月　中田　笑子
未完なる学徒の画布や銀杏ちる　百川　秀子
山襞を深むる夕日山眠る　山﨑美知子

卯の花や声透き通る雨上がり　出澤　洋子
三文判少し曲がって押す小春　豊田　幸枝
頭つから断る話鵙鳴けり　鳥海　壮六
畑中の押しも押されもせぬ桜　中田　笑子
愚痴を言う訳でもなしに浅蜊かな　中津川晴江
とびはねて田道行く子や春祭　中根　和子
想う人遠くになりし隙間風　中根登美子
白もまた燃える色なり水仙花　中村　昌男
空蝉の爪のくい込む葉裏かな　中村　裕子
つくばひに朝のひかりや燕の子　中山智津子
故郷の川は変らず水温む　野川木一路
初夏や水の匂ひの駅に降り　陌間みどり
補聴器を外して長き夜を独り　長谷川きよ志
幾度もかなかなに濡れ朝は来る　畠　梅乃
限りあるいのちの戦虫時雨　原　仁子
海原に月光といふ銀の帯　肥後ちさこ
ちちの句の揺れて風鈴ちりちりん　廣田　悦子
初蝶や空の忙しき基地の町　深澤　一華
望郷や夜なべ仕事のちちとはは　二上　光子
花吹雪もつたいなくて幸せで　二見　和江

玉眼に灯明ゆらぐしづり哉　庄司　下載
セーターに峠の風の尖り来る　瀬戸　りん
車庫跡の畑五坪やじようびたき　高橋久美子
次の雲までの茜や浮寝鴨　中山智津子
綿虫に空のつめたさ降りてきし　齊藤　桂
トンネルの上の茶畑夕笹子　芹澤　常子
綿虫や自問の果ての空青し　深澤　一華
追伸の一行に春来りけり　大島美恵子
笹鳴やつひぞ直らぬ人見知　田下　昌人
着ぶくれて遅れがちなるバスを待つ　中根　和子
残月や竿に触れる手悴める　加藤　幾代
処方薬多めに貰ふ嘘かな　高橋千代子
天窓の冬満月や友悼む　守屋　まち
石蕗咲くや日のさんさんと極楽寺　米山　翠
地球一周行ってみたしやお正月　來田　新子
富嶽より風の太きや枯野道　青山　典仁
底魚の旨き季節や冬ぬくし　大沢　年子
弓を引く乙女の瞳初稽古　小林　環
河川敷走る親子や青木の実　澁谷　明子
病院の窓一面に冬夕焼　下平　美子
駅ビルの小さき本屋春隣　鳥海　壮六

手に砕く土の温もり遠蛙　古屋　徳男
案山子立つ二反三畝のどまん中　寶子山京子
寒椿どこへ落ちるも我が人生　穂坂志げる
ひぐらしやアルバム整理半ばなる　星　一義
冬晴れの洒水の滝は一途なり　本多登美子
胡瓜生るきのう三本けさ五本　松下　俊之
足裏より漲る力青き踏む　松良　榮美
線香花火ポトリと落ちて恋終る　峯尾ユキエ
木登りの少年を見ず鳥雲に　村場　十五
まんさくや片手に拝み抜ける杜　百川　秀子
凩やさらはれて行く街の色　森田　久江
大鳥居出でて一礼春の人　守屋　まち
七草や摘む手に触れるははの影　安池　利枝
鰯雲これが最後の二人旅　柳川　紀枝
酒匂川淀に冬を集めおり　柳澤ミサ子
錠剤を飲むひとつづつ日脚伸ぶ　山﨑　悦子
夕富士にかかる笠雲青田風　山﨑美知子
セロリ噛む人とかかはることが好き　山田　照子
春疾風茶髪が走る人力車　山本　すみ
杣山の散策が好き草の花　湯本とし子

一羽発ちしぶく池面や探梅行　古屋　徳男
御降りにここぞと傘をおろしけり　村場　十五

◆草むら（12・20）　重満報

待春やこころ抑ふる畑整理　石井　秀稀
注連縄飾り喉（のみど）を通る生卵　佃　悦夫
去年今年住みし相模の国の端　佐々木重満

◆青梅（1・22）　由里子報

初富士の裾まで見えてふたり旅　大塚　行人
着ぶくれてくつろぐスマホ小半日　湯本とし子
冬の海見ゆる高さに墓標立つ　加藤まり子
冬の月残して門を閉ざしけり　久保寺トミ子
日脚伸ぶゆるゆる脱皮してみよか　田中　幸子

◆無所属

スケジュール一人に重し千六本　小林永以子
大鷹や盆地より霧溢れたる　畠　梅乃
福引の六百円を拝みけり　岩楯惠津子
ストーブや夫と新聞取り換へて　出澤　洋子
無器用と器用が並び障子貼る　一ノ瀬茂代
ソプラノが降って来そうな冬銀座　田畑ヒロ子
風花や刻を跨ぐ恋君がいる　穂坂志げる
初稽古干支の飴玉選びをり　山田　照子

巡礼の身に置く言葉神無月　湯浅　義幸
墓仕舞ふ読経粛々冬紅葉　横塚　昌平
庭園は英国風に薔薇の門　吉田　百代
人はみなよきものもちて草の花　吉田　康雄
谷間に三角の空月凍る　米山　翠
手帳開け旅の予定や初紅葉　來田　新子
春雷やざんばら髪のまま眠る　若村　京子
風光る無人の駅の発車ベル　和田恵美子

新作5句

大沢　年子

水仙や朝日差したる庭の隅
底冷えの靴音響く地下通路
日の当たる空家にふくら雀かな
風音に寝つかれぬ夜や冬深し
寄せ鍋や普段ひとりの祖母の家

＊投句の上でのお願い＊

俳句大会投句と同様に毎月の投句についても、楷書で大文字小文字をはっきりお書きください。

（広報部）

初春や曼陀羅に色加えたり　岡田　典代
脳髄に悪文湧いてくる師走　瀬戸　正洋
蓑虫や自家薬籠の陀羅尼助　小島ノブヨシ
弓を引く形の列島北風　北村　文江
いとおしき月日の流れ福寿草　杉山あけみ
川が川の囮になっているような　大石　雄介
きさらぎ駅はスズメ千二百羽だった　大石　和子
黒まぐろ大俎の隙のなさ　山本　すみ
一月ののさばっているウイルス群　小澤　園子
振り向かぬままの別れや沈丁花　杉崎　せつ
寒風や藁筆で掃く富士の雲　須田　聡子
春の空義母さん御襁褓（おむつ）替えましょう　大佐田うづき
病室（へや）に聴く初観音の鐘の音　神野美代子

＊

◆お詫びして訂正します◆（1月号690号）

1頁池田忠山さん抄出の中村裕子さんの句

（誤）聞き役の八千代薫草の花

（正）聞き役の八千草薫草の花

俳句おだわら鑑賞（令和６年12月号）

岩本ひさみ

子と影を重ねて歩く良夜かな　　**青木たけを**

老いたせいか、夜、外に出ることはほとんどなくなりました。夜道の人影など思いもかけない景色です。それがしかも子とふたりで歩いている様子とは？

思い返せば、私も子どもが小さい頃手をつないで満天の星を仰いで歩いたことがありました。まさに「影をかさねて」でした。

ほのぼのとした親から子への愛情を感じさせた一句でした。

髙井幸子

風神が捌く落葉の舞納め　　**足立和子**

風神と落葉の物語を読んでいるような気がしました。風神は、落葉の舞納めに至るまで、長くその様子を愛おしく眺めていたのでしょう。いろいろな風を起こして。風神の言葉が聞こえてくるようで、とてもかわいらしく思えてきました。秋も深まってくると落葉があちこちに散らばり、ちょっと厄介者ですが、楽しい俳句に出会いほっこりさせられました。

新作５句

香川　花子

蓮枯れてまだ息吹ある水辺かな
返り花人目を避けて人とどめ
錦繡の衣をまとい散る紅葉
小夜時雨演歌の一節唄いけり
寒の道風に追われて三千歩

加藤　富江

又一つ今が重なる年始め
ゆったりと春いくつ越す俳句道
辛うじて温顔の報能登の春
恵方道歩巾を広げ進み行く
梅一輪人肌の陽を背にもらう

高橋千代子

白菜を使ひ切つたり一人鍋
蜜柑山より伊豆大島のくつきりと
朝食のパンに戻りし四日かな
日の当たるフロントガラス冬の蠅
聞こえたる振りすることも木の葉髪

山﨑美知子

ギプスとれ揃ふ掌冬ぬくし
再挑戦の三年日記買ひにけり
我の背を越えし男の子や餅を搗く
姉夫婦来て静かなる大旦
風花や井水に洗ふ古端渓